

おてがみ（アーノルド＝ローベル作）

ガマくんは毎日、玄関の前に座って手紙を待っていました。毎日、毎日、ずっと待っていましたが、手紙は全然やって来ませんでした。それはガマくんにとって一番悲しいときでした。時々、ガマくんの親友のかえるくんは一緒に座って、一緒に悲しんでくれました。

でもこの日、カエルくんは別の考えがありました。ガマくんと一緒に待つ代わりに、「ガマくん、今日はお家に帰らなきゃいけないんだ。大事なことをするのを忘れてしまって。」そう言って、カエルくんは急いで家に帰りました。

ガマくんは、一緒に悲しむことよりも大切なものとはなんだろうと不思議に思いました。しかし、ガマくんは疲れたので、お昼寝をすることにしました。しかしすぐに、カエルくんが走ってガマくんの家にやってきました。ガマくんは寝ていました。だからカエルくんはショックでした。「ガマくん、起きて手紙が来るのをもう少し待ったほうがいいよ。」と、カエルくんは言いました。

「いいや。」と、ガマくんはあくびをしながら言いました。「手紙を待つのにうんざりしたんだ。」

カエルくんはガマくんの家の窓から道の向こうを見ました。でも、誰もこちらにやって来ません。「誰もぼくなんかには手紙を書いてはくれないんだ。手紙なんて無いよ。」ガマくんはため息まじりに言いました。

「でもね、ガマくん。誰かが今日、手紙を送るかもしれないよ。」と、カエルくんは言いました。

「馬鹿なこと言うなよ。今まで誰もぼくに手紙を送ってくれなかったんだ。今日だってそうさ！でもカエルくん、なんでずっと窓の外を見ているの？」

「今朝、カタツムリくんの手紙を渡して届けてもらうように頼んだからさ。」カエルくんは笑いながら言いました。

ガマくんはおどろきました。「本当？手紙には何を書いたの？」

「こう書いたんだ、『ガマくんへ ぼくは君と親友になれてうれしいよ。カエルより』ってね。」

「わあ、それはいい手紙だ。」

それから、カエルくんとガマくんは玄関に行って手紙を待ちました。おたがい幸せな気持ちで座っていました。4日待ちましたが、カタツムリくんはついにガマくんの家に着き、カエルくんからの手紙を、ガマくんに渡しました。

ガマくんは、手紙をもらって喜びました。